大学紛争と反原発運動と大学改革

随　筆

宮　﨑　慶　次*

Radical Campus Dispute, Anti-Nuke Movement and Restructuring of University

Key Words : Campus Dispute, Anti-Nuclear Movement, Restructuring of University, Mass Media, Graduate School Oriented University

大学紛争から四半世紀余り，今やほとんどの体験者が大学を去り，遠き日の追憶の彼方に消え去ろうとしている．決して楽しい思い出ではなく，正史では本質は語られない．だが，私の住む原子力の世界では未だにその亡霊は反原発運動の中に生きている．自己否定を求め大学解体を叫んだ過激な全共闘運動は，左右のイデオロギー対立の中で，左翼跳ね上がり分子が生んだ時代の落とし子と片付けることも出来よう．しかし，そこには現代社会が問われている幾多の根源的な問題が提起されている．図らずもその渦中に身を置くことになった一人として，そこから得た教訓を明日への原動力として活かさねばとの想いで現役を退く前に回想の筆を執った．

大学紛争始まる

昭和35年電気工学科を卒業，造船会社に勤務後，大学院で原子力工学を専攻し，昭和44年春に助手となった．折りしも，全国の大学紛争の嵐が大阪大学豊中キャンパスに，そして，ついに吹田キャンパスにも波及した．まず，7月7日に原子力本館が，8月には電気系本館がバリケード封鎖され，10月中旬になってやっと封鎖が解かれた．封鎖学生またはシンパ(Sympathizer：親派)には原子力工学科の学生がかなりいた．原子力は平和利用と核兵器が諸刃の剣として学生の社会的関心が特に強かった．紛争の発端は東大医学部の封建的体質への問題提起であり，阪大では生協紛争であった．しかし，原子力は違った意味での権力の象徴として反体制運動の格好の標的となり易いことは昔も今も変わりがない．

当時は師匠の故吹田教授(後に原子力委員を経て原子力安全委員長を歴任)が工学部長を勤めていたので，深夜の大衆団交にもよく出席した．元柔道部の私が護衛役，西川さん(現工学部教授)は運転手役も務めてくれた．阪大の全学闘争委員会(全闘委)は中核派が握っていたが，覆面にヘルメット姿で手にゲバ(Gewalt)棒の独特のスタイルで前方に陣取り，多数の学生を前に部長や教授に威圧的態度で一方的要求を突き付け確認書に署名を迫る．終始，プロのリーダーが導師役となって詰問し，答弁の矛盾を巧みに突き，聴衆に当局者の非を訴える一点突破方式だ．部長や評議員に向かって「お前は」と罵るが，団交が終わり聴衆が去るや，「先生，ご自宅まで車でお送りします」と態度を豹変させる．何とも許し難い光景であった．

*Keiji MIYAZAKI
1937年3月18日生
昭和35年(1960)3月大阪大学工学部・電気工学科卒業
現在，大阪大学大学院，工学研究科，原子力工学専攻，教授，工学博士，原子炉工学
TEL 06−879−7879
FAX 06−879−7880
E-Mail miyazaki@nucl.eng.osaka-u.ac.jp

学園封鎖が続く

工学部内の世論は，「封鎖解除には機動隊を導入し学問の自由を守れ」と「大学の自治を守るべく機動隊導入絶対反対」との意見が真っ向から対立した．原子力工学教室としては，短絡的な機動隊導入による収捨不能な学内の混乱を避け，出来るだけ話し合い路線で学内世論を封鎖解除に導き円満解決を図る方針で一致していた．それが見方によっては弱腰とも映り，また，機動隊導入への地均しともとられた．

一般学生とよく酒を酌み交わして討論にふけったが，封鎖派学生とも話会い，「専門馬鹿」と罵られ，「専門抜きの正真馬鹿」とやり返し，「俺達は貴い青春を賭けて闘っている」に対し「残り少ない我々の中年はもっと貴重だ」と他愛のない遣り取りもした．早く正常化するため，教授会，助教授会，助手会，職組などで連日会議が続いた．多数の教官とも話し合ったが，複雑な人間模様での個別の不満がさも普遍性を装って捌け口を求めていることに気付いた．また，講座制のもとではその長たる教授の人格の重要さを思い知った．

学科代表に集まってもらって封鎖解除に向けて開いた連絡会議が襲われて閉じ込められた．素早く逃れたが，他学科の先生の救出のためわざと拘束された．トイレに行かせてもらえず，その時ばかりはこちらが腕力を行使した．結局，「今後は封鎖解除の会合は持たない」との確認書にサインして拘束を解かれた．高齢の先生方の健康を考え，「身体拘束下で強制された確認書は無効」と宣言してさっさと応じた．だが，政治組織に属す教官には由々しき問題とあって交渉が長引いたが，やっと上部の許可がおりたらしく結局サインした．我が身のノンポリ(Non-Political)の気安さを実感した．

封鎖解除後，職組で「大学の教官の給料の大幅改善には教師聖職論」を唱えたが，「教師労働者論」で一蹴された．ところが，中央の見解が変わると，「聖職者的側面もある」と変わった．是非は別として，「統制組織は嫌い」という思いでは封鎖派学生とも共通していた．後に職組が反原発の方針を打ち出し私は脱会した．

原子力本館が封鎖されていては実験棟で研究を続ける訳にもいかず，封鎖反対を工学部に呼びかける会議とビラ作りに励んだ．一方では，右から左まで種々雑多な本を読み，これほど多くの学生の共感を呼ぶものは何かを真剣に考えた．中でも「知性の叛乱」は東大全共闘運動の指導者が主張を著わした本である．大学の封建性を打破するために教授会・講座制を解体すべきとの主張が多数の学生の共感を得たようだ．大学の「学問の自由」そのものが，大資本と国家権力の庇護のもとで，人民の搾取の手段に過ぎず打倒すべきと位置付けた左翼の反体制運動である．

折しも，中国では文化大革命の最中で，経済改革派の幹部達が頭に三角帽子を被せられ胸にプラカードをぶら下げて，毛沢東語録を手にした若い紅衛兵によって引き回される姿がTVで報ぜられた．奪権闘争であり，自己批判を迫り確認書をとるのも政敵の失脚を正当化する手段である．動機はともかく，こんな真似事をする全共闘運動の手段の稚拙さには呆れた．彼らが好んで口にする科学的認識には，人間の感情に対する認識が欠如していると．

自力封鎖解除の試み

学内的な支持や支援を得るには，何らかの行動で封鎖反対の意志を明確に示す必要を感じていた．教室の若手有志が相談し，夜陰に乗じてバリケードを少しずつ取り除き，中の人数が最小になるタイミングを図って，私が白ヘルメット姿の隊長となって笛を吹き有志学生数十人と一緒に踏み込んだ．留守居役を頼まれた学生二人が寝呆け顔で出てきたところを捕らえた．驚いたことに一人は顔見知りの原子力の学生である．野次馬や組織の連中が警察に突き出せと騒ぐ始末となった．早速，工学部長に伝令を走らせて，予期通りの「反省を確認して放免」との回答を貰って無事放免し，若者の将来を傷つけずに済み安堵の胸を撫でおろした．

封鎖解除の数時間後には，豊中キャンパスから中核派ゲバ本隊が駆けつけ，再封鎖となるが，自力解除の意志を示す目的は果たした．原子力を弱腰とみていた電気系教官からも歓迎を受け，

連帯意識を強める結果となった．私自身は足を挫いて，途中まで車に乗せてもらって逃げ，タクシーと電車で岸和田の家に帰ったが，後日，封鎖派からは指さされ，恐怖感を味わう羽目になる．だが，周辺では事が順調に運んだと見て，もう一度封鎖解除をとの動きとなった．当時，ソフト路線の吹田工学部長の講座にあって，封鎖派学生は藤家助教授(現在原子力委員)を話の解る理論右翼，助手の私を行動右翼と綽名していた．自身では中道を任じていたし，所期の目的を果たしたので行動隊長はお断りした．それならば電気を切ろうとの相談が出来た様で，原子力本館電源室の碍子除去作業中に山口源太郎氏が高電圧に触れて亡くなった．

前日から助教授は東京出張中で，高電圧の怖さを知る私は，逸る学生に「絶対に参加するな」と厳命した．山口氏は電気の後輩で，会社からのスピンオフ同士で好印象を持っていただけに，担架で運ばれる姿には胸が締め付けられる思いがした．だが，彼への思い出を綴った著書「不死鳥」の中で多くの人が賛美するような心境ではなかった．彼の行動を制止すべく説得出来なかった無念さで一杯であった．温厚な故山村教授(電力工学)が「だから電源を切れと忠告したのに」と抗議し吹田部長が詫びた．日頃は仲の良い二人からは想像し難い強い口調であった．彼の死は我々原子力教官の心に重くのしかかると共に，封鎖派にも影響を与え，結果的には封鎖の早期解除をもたらした．

大学紛争の後始末

紛争が収まった数年後，原子力学生の元阪大全闘委々員長(上位が次々と逮捕されて結果的にそうなった)が町工場で勤めていたが，大学復帰を願い出て，持ち前の度量で故吹田教授が受け入れを決めた．助教授は海外出張中で，私が世話をすることになった．「何故封鎖派の先生に師事しないのか」と問うと，「彼等は信用できない」というが，当方としても都合良く簡単に靡くような輩は信用出来ない．だが，「窮鳥懐に入るときは猟師も殺さず」の心境で引き受け，その大物の他に彼の親友と，翌年には自分が捕らえた学生の面倒をみることになった．

その豪傑ぶりは，夜中に新婚アパートに一升瓶を数本持参して押しかけ，騒いで110番通報で警官がきた．床に平伏して謝って追い返し，また騒ぐ始末で，翌日，家内が菓子折りを持って近所に詫びに回ったこともあった．国際反戦デーの前には宿題を出してチェックし，本当に足を洗ったか気配りはしていた．ところが，阪大の学生寮で革マル派が旧中核派の寝込みを襲った事件が新聞に載った後，大物とその親友が研究室から消えた．寮に行って調べたが口が堅く，遙として消息は掴めずにいた．数ケ月後に姿を見せた時には一人の前歯が数本欠けていた．

だが，一番苦労したのは就職で，大物の面倒ばかりは教授にお願いしたが，他の学生のは奔走して助手の才覚でも何とかなり，今は彼らは立派に一流会社の幹部として活躍している．職探しで，文部教官なのに助手という名称の持つ惨めさを痛感した．後に外国留学中は Assistant Professor で通ったのに．未だに，教授の小間使いと勘違いされかねない助手の呼称がそのまま残っている．大学審議会に早く何とかしなさいと申し上げたい気持ちである．

大学改革への圧力と胎動

それから10数年を経て，助教授時代に自民党の研究開発体制活性化委員会に呼ばれた．私への聴聞は，特殊法人たる原研と事業団たる動燃の在り方と国立大学についてであった．中曽根民活と呼ばれた時代であったが，「原子力の安全性と核燃料サイクルの確立は国が責任を持って当たるべきで，動燃の親方日の丸体質の改善は必要だが民営化は時期尚早．大学に関しては，自己改革は無理．任期制など試行的制度を本気で導入するなら，旧帝大に対抗できる新規拠点大学を作って競争させるのが最善」との趣旨の意見を具申した．その他，研究設備の旧式化や研究費の貧困など大学の窮状の改善を訴えた．熱心に聞いてくれたし速記係はいたが，税調論議の最中で国会議員の方々も心ここにあらずで，どこまで当方の真意が伝わったかは分からない．

でも，議員の口からは「自分達は選挙の洗礼を受けるが，大学教授は終身保証で封建体質は目に余る」との言も聞かれた．国鉄の民営化を

果たし，次は事業団・特殊法人であり，国立大学の改革にも着手との意気込みを感じた．戻って教室で改革の必要性を説いたが「狼少年」の烙印を捺された．それが，私が教授昇進の頃には，文部省からの外圧で大学院重点化の時代が始まり，「本当に狼が来た」と妙に信任を得る結果となった．そこで必死に検討して各方面と折衝し，学生の将来進路と原子力産業界の特質及び電気から派生した沿革を考慮して，結果的には阪大原子力は電気系との路線を敷いた．その責任上，退官まで後少し頑張って成果を見届けたい．

工学部に目を転ずれば，大学紛争時代に提起された改革課題は何が解決されたろうか？ 例えば，助教授の学位審査への参加は歴代の助教授会の要求事項であった．助教授の研究体制上の独立性を強め，必然的に講座制の実質的な改質へと繋がる流れだけに，当時の教授会の拒否反応は強く，また，学位認定を教授の特権と見る節も見受けられた．だが，助教授の大半は次期教授候補であり，専門性からは教授より相応しい助教授も多い．他大学の前例を云々する以前に，学位審査の内容を充実させるため，助教授に参加意識をもって協力してもらうことの意義が大切だと思うのだが…．学位は教授会の審議事項であっても，主査が教授であれば，必要に応じて助教授が審査に加わるのは支障はない筈だ．

助教授会委員長のとき，工学部首脳に打診したが駄目であった．今は助教授側も諦めて要求すら出していない．幸い，今の工学部教授会の構成員の大半は，大学紛争時に助教授か助手または学生として要求した側であった．助教授の参加を認める気運も醸造されており，今こそ実現の時期であろう．また，別の要求項目であった教授会の公開は，人数が多すぎて実質的な議論が行われ難く，むしろ意思決定の方法をどう改善するかと，公開もさることながら，情報伝達の改善が喫緊の課題となっている．

大学紛争は多くの人の人生を分けた．「お前はどうなんだ．主体的に答えろ」と厳しい問題提起を突きつけられて，真面目な人ほど学生の側に立って，平時ならば言わずもがなの発言をしたばかりに教授の心証を悪くし，不本意ながら大学を去った有為の教官も多いと思う．体制側に立った人にしても，出過ぎたために不評を買い損をした例もある．結局，我れ関せずと論文作りに励んだ人が得をした面も否めない．私自身も「問題提起」による精神的な紛争後遺症で，研究に専念する「甘美なる日常性」を回復するのには年月を要し，また，人生観に少なからず影響した気がする．あの騒ぎは何だったのか，その意味を問い直す昨今である．

反原発運動

故吹田先生が退官後14年の時が流れて年号も平成と改まった年，幸いなことに，私は遅咲きの教授昇進を果たした．通産省の原子力発電技術顧問として安全審査に加わることは，大学の中立的使命と考えたし，何度か打診もあり卒業生の要望もあった．だが，助教授の身では遠慮もあり，また，長年教授欠員の研究室を預かる身としては，頻繁な東京通いは教育面での問題もあり，断り続けていた．意を決して引き受けた直後に教授になれて正直ほっとした．

二年後の平成3年には，美浜2号機の蒸気発生器伝熱管破断事故で新聞に正確にコメントしたのがきっかけで，学会一点張りからマスコミとも付き合うこととなった．事故から数ケ月後，原子力文化振興財団の依頼で，大阪での原発反対派の集会で講演・討論に参加した．賛成側は，私と相方の講師と事務方の3人で，各地の「原発を憂う会」などが動員した聴衆150人以上に囲まれて，久々に緊張感を覚えた．講演後の討論では，専ら導師役が講師を詰問する形式で進められた．関電の思い切った情報公開方針で，事故の事象推移などは学会でも説明されていたが，何故その伝熱管だけが折れたかは決定論的な観点では説明し切れない．材料力学の専門家と思しき導師がその点を執拗に攻めた．特に，相方が事故調査委員とあって質問を集中させ権威を失墜させる魂胆と見たが，相方の講師はなかなかの論客で鋭く反論した．残念ながらマスコミや電力の傍聴はなかったようだ．

絶対安全だと強調してきた電力会社の広報の仕方は問題だと思うが，安全審査での想定事故

であり，多重防護の観点から全体像を論ずる私達とは議論が噛み合わずに終わった．関電が旧い蒸気発生器を丸ごと取り替える方針を打ち出しているのに，そこばかり責めるのは一点突破主義の表れである．学生と思しき聴衆に，韓非子の「蟻の一穴が堤を崩す」の喩えは教訓とするが，安全性とは全体像が重要で，「木を見て森を見ず」の視点だけでは本質を見失う．若い諸君はよく考えて欲しいと言い残した．

思い起こすのは，大学紛争時の「大衆団交」との酷似だ．その会場にも見覚えのある封鎖側教官の姿があった．原発反対運動には草の根的な市民運動としての性格があるものの，その指導者には全共闘運動の支持者が多い．若気の至りで過激な行動に走ったが潔く玉砕した「完全燃焼組」と非を認めた「自己否定組」は思い切り転向し，今や体制側として指導的役割を果たしている．燃焼し切れなかった「中途半端組」が形を変えた反体制運動を続けている．私自身はといえば，全く逆の立場で反体制運動と係わる中で，決して賛同はしないが，いつしか理解者となっているのかも知れない．武力占拠者と人質の間に長期間の相互作用として理解や友情が生まれるのをストックホルム現象(症候群)と言うそうだ．

大学紛争の体験者は，ある年代を大学の学生または教官として過ごした当事者に限られる．一般社会の方々や大多数の学生は傍観者であり，常識外のこととして，そこに認識の差が生まれるのは当然である．ある時，もんじゅの件で役所の課長が突然，反対派の申し入れに応じて話し合うと言い出した．「鍵は大衆の理解．反対派との公開討論は大いに結構だが，非公開の話合は無意味」と助言した．だが，是非にと言うことで同席した．二度の呉越同舟で和やかな雰囲気で話し合いが進んだが，認識の差が出て，役所側が「相手の態度が非妥協的」と中止になった．これでは逆効果で，お互いに譲れない基本的立場は尊重しつつ，多少でも相手の主張の正当な点を認めようと努力するのか，さもなくば，相手の手の内を探る戦術でなければ意味はない．やはり，社会的受容性を考えるとき，大学紛争の経験を抜きには語れないような気がしてならない．さしたる正当性も持たない反原発運動がかくも盛り上がるのを目の当たりにして，対処療法だけで根本的な分析を等閑に付してきた推進側の怠慢や稚拙さを実感させられる．マスコミや運動指導部の指向性や根底を流れる思想的背景の沿革・譜系に注目した分析と対応が必要だと感じている．

マスコミとのつきあい

最近，「もんじゅ」事故を契機に再びマスコミとの接触が増えた．マスコミ関係者の上層部の多くは，多分，全共闘世代が占めている．一般企業が採用せず，多くがマスコミや大学という自由業に流れた．反原発の指導者は殆どが全共闘運動時代の反体制派である．旧ソ連・東欧の体制崩壊後も古いイデオロギー体質から脱却できていない場合が多い．また，過去に大政翼賛会に加わったとの悔恨の念が昂じて，体制批判ならば見境なく是とする「翼賛会後遺症」体質を今に残す大新聞もある．だが，私の場合，立場や意見が違っても割合に話が噛み合うのは大学紛争体験が背景にあるためであろう．

「事故が起こった場合，正しくコメントするのは大学の先生の役割です．取材から逃げれば，結局，原子力は危ないと思われても止むを得ません」とは何人かのベテランや女性記者から伺った忠告である．それを肝に銘じて取材には誠意を尽くしている．また，若い現場の記者と話すのは勉強になる．しかし，やはりマスコミは怖い．先方には先入観があり，特に事故などでは記事の筋書きが出来ており，都合の良い部分を摘んで記事にされたり，記事は正確でもとんでもない見出しが付くのは何度も経験した．それに，限られた情報でのコメントが間違っておれば，専門家としての見識が疑われるのみか責任を追求される．一歩間違えば，反対派どころか推進派からも弾が飛んでくる．やむなく，「犬に手を噛まれたら，押し込め．犬は苦しくて噛むのを止める．引けば深い傷を負う．」と言う自己流理論と無手勝流で対応している．

今，動燃は「もんじゅ」と「アスファルト固化処理施設」での重なる事故での対応の悪さで袋叩きにあって信を失っている．動燃は国際的

な核問題や協定などの束縛で必要以上に非公開体質が身に付いてしまった．美浜の事故と比較すると，電力会社はその事業や安全確保については通産省の規制下にあるとはいえ独立した企業体である．だが，動燃は予算も人事も科技庁が握っている．トップダウン型組織の体質改善にはトップの意識改革が肝要で，科技庁・動燃首脳部が公開を率先・奨励すれば，時間がかかっても改善されよう．しかし，与党や産業界からも改革どころか動燃解体の声を耳にするにつけても，10数年前の議論で動燃自身は電力には譲歩する形で保身を図っただけで，恐怖心でかえって自閉的になった．あの時にもっと外に開かれた自己改革を志向しておればと悔やまれる．その反省を踏まえて，国民に支持される動燃として再生することを切望する．

大学院重点化の動き

さて，国立大学はどうか．「大学の自治」の旗の下にボトムアップの意思決定が建前である．だが，大学紛争の対応例からみても，非効率的で時間がかかり，緊急事態には対処出来ない．それに教官の大半は，現状が一番に住み心地が良くなって進取の気性が薄れ，時として大学以外では通用しない非常識を通用させてきた．また，進歩的ポーズを取った人で，教授になると専制君主となる例もある．自分が苦労して得たポストだからといって，既得権を守ろうとする古い体質から脱皮できないようでは，その組織はいずれ衰退する．人はしばしば潜在要因が顕在化する時間遅れに気づかない．大学が自己改革を怠るうちに，日本の教育界を混乱させた張本たる文部省と日教組の不毛の対立が解消し，教官の任期制導入が答申され，果ては国立大学の民営化の声も出始めている．そして，十分な議論と合意がないままにトップダウンで決めざるを得ない状況で改組が進んで行く．

工学部では大学院重点化が成功したのには，先輩教授や執行部の並々ならぬ努力の賜物であり，ご苦労は多とする．だが，今後を考えると手離しでは喜べない．大学院重点化を謳いながら，修士課程の定員が基幹講座当たり2名のままである．現状を実体化するのであれば，4名程度が妥当な線であろう．逆に博士課程の定員を増やして充足できるのか，現状では社会の必要性があるのか，受け入れ体勢が整うのか懸念が残る．工学部の場合は背後にある産業の成熟度にも大いに関係する．発展途上の分野の方が研究的側面が重視されるのは当然で，同じ尺度で律しようとすれば無理が生ずる．

また，大学科制への移行は文部省の方針と聞いたが，それで本当にきめの細かい教育ができるのか？ カリキュラムの共通性と学生の学科・学部間の移行の融通性を高めるのが本旨ではないか？ 事の本質は，学生を低学年から狭い専門領域に囲い込むことなく，自分の研究補助者として使役することなく，将来に対する選択の幅と広い見識を持たせる教育が求められていると私は理解している．要するに，学生の立場を重視する教育が原点である．今回の改革の目玉の一つは教育主体の学部と研究主体の研究所の間の協力・交流にある．学生が多い工学部と大型研究設備や予算の豊富な研究所が交流すれば，お互いの特徴が活かされて効果的に機能する．だが，均質化ではなく相互補完による機能強化が目的であることを忘れた学生数の均等配分要求など各所に総論と各論のギャップが目立つ．改革論議を聞いていると，自己都合が余りにも優先されて，失望感を禁じ得ない局面も多い．要するに，我々は学生の立場を重視する教育が原点であることを忘れてはならない．

今後は文部省のいい子になるだけではなく，教育・研究のプロとしての自らの体験に基づく見識を示し主張を実現する努力をして欲しいと願っている．阪大の場合，文部省に対して強くものが言える条件を備えている．大阪という地方最大都市にあって，人の褌でなく自前の研究成果に基づいて発言出来る強みがある．反面，自己改革が率先的でなかった反省もあろう．

原子力の反省

初期の原子力白書が謳ったように，将来のエネルギー確保という社会使命に加えて，波及効果も期待されるという夢があった．それは今も変わらない．しかし，かつては原子力と名が付けば，優秀な人材と豊富な予算が，そして最先

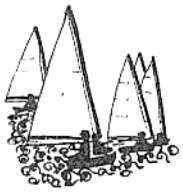
端技術が集まり，それを育てる温床でもあった．その状況に安住し，社会的要請と周囲の支持あっての原子力との視点を忘れてきた．また，科技庁・動燃の体質問題が象徴するように放射能を閉じ込める努力と共に情報まで閉じ込める閉鎖社会を築いてしまった．一般大衆は「自分達が知らない所で事が進められている」と疎外感や不信感を抱けば必ず反対にまわる．正しい理解と参加意識こそが積極的支持の源泉となる．

幸い，大学では公開性は保たれてきた．情報を開示し，その上で国民の理解と判断に委ねるのが民主主義の原則である．しかし，民主主義が健全に機能するためには，優れた見識を備えたオピニオンリーダーと情報を正しく伝えるマスメディアの存在が不可欠である．残念ながら，多くのメディアは長期的視点と見識を欠いている．その意味で大学の原子力関係者が，関連分野の方々の理解と協力を得て，社会的受容性へ一層の努力をすることが期待される．

東大が原子力の名を捨て，システム量子工学科・専攻と改め，北東日本の大学は皆これに倣った．量子工学への新展開という趣旨は結構だが，受験生の動向に媚びる姿をそこに見る．阪大ではこれに迎合せず，地球環境保全に対し原子力が果たす役割の重要性を再認識して，原子力の名を積極的に残す決意をした．ただ，他大学でもそうだが，工学部内では弧高を保つが如くで，他学科との交流は十分でなかった．互いにもっと協力すれば，先進的で壮大な計画が実現できたであろうに．原子力の古き良き時代の恩恵に預かった末裔として，怠慢を深く反省し今後に活かさねばと考える．原子力は科研費の複合領域であるように，幅広い学問分野によって支えられている．他分野との積極的な交流を通じて，恒に先端・先進性を保つ厳しい努力こそが今後の最も重要な課題である．

結　び　に

昭和20年の太平洋戦争の敗戦で日本人は極めて劇的な価値観の変動を経験した．また，戦後の民主主義は資本主義と社会主義の鋭い対立の構図の中で過ぎてきた．私の高校・大学時代とその後の大学紛争でも，世の中に悪や矛盾があれば，全ては資本主義体制の欠陥に帰するのが反体制運動の常であった．ソ連・東欧の共産主義体制が崩壊した今やそれは通用しない．その後も，経済バブルの崩壊，いじめ問題，オウム事件，情報社会の到来，そして私の関連する反原発と，価値観の変動を伴う事象が今も続いている．だが，何事によらず，体制を前向きに建設的に改革するのか，瑕疵に拘泥し反体制となるかの志向性が基本的な立場を分ける．

現代社会の文明の進歩の中で，価値観の変化は徐々に無意識にではあるが，着実に進んでいる．激しく変動する社会にあっては，歴史に学び自己の経験で得た価値の基軸を持ち原点に立ち返って，来るべき未来を洞察する以外にはあるまい．私は研究者で教育者でもある現役の大学教官として，語弊や批判のあるのは承知の上で独断と偏見を交えて，自分流に大学紛争を回想し，教訓として何を学び何を次代に伝えるべきか所見を述べてみた．

（平成9年4月7日記）